慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

平成27年度 100回生入学式

医学部114名が入学

さる4月1日、平成27度慶應義塾大学入学式が、日吉記念館にて執り行われた。小雨の入り混じる曇り空の中だったが、日吉キャンパスには大勢の人が押し寄せ、活気に満ちあふれていた。

式典は午前と午後の2部構成で行われ、医学部は経済学部や看護医療学部、薬学部とともに、午後の部への参加であった。また、岡野栄之教授が医学部長として出席する初めての公の場となった。最初に長谷山彰常任理事による学事報告が行われ、各学部の入学者数が発表された。本年度の入学者数は6671名、医学部は114名、看護医療学部109名、薬学部が216名であった。慶應義塾全体の入学者数は前年度よりもわずかに減少したものの、ほぼ変わらない数となった。医療系学部としても昨年度の入学者数から大きな変化はなく、医学部の入学者数については1名増となった。

続いて、清家篤塾長により式辞が述べられた。塾長は、「現在の日本は社会構造の変化と国際化の真只中にいる。これは福澤先生の生きた時代の近代化と同じである。福澤先生は、従来の身分制度の崩壊に伴い、賢い人と愚かしい人の差は学問のあるなしであると説いた。是非入学生の皆様にも、勉学に勤しんで頂きたい。近年、スーパーグローバル大学にわが義塾も認定され、国際競争力の向上を期待されている。従ってそういった面での貢献も新入生諸君には期待したい。課外活動に精力を出す、といったことも大切となってくる。また、福澤先生は、〝実学〟を重要視していた。実学とは、科学のことである。義塾の精神に則り、他人を教え触発するものを心の中に抱き、対等な関係を築きながら半学半教の精神で学んでほしい」と述べた。

式辞に引き続き、壇上の各学部長が一人ずつ紹介された。教職員代表祝辞では、渡辺靖環境情報学部教授が、「私は敢えて、現実的な三つの話をしたい。一つ目は、現実は変わるということだ。私が大学生の頃は、今日の中国の経済成長、インターネットの発達等は、全く予想が出来なかった。未来予測は難しい。だからこそ一分野に囚われない広範な知識を持ち、偏見を捨ててほしい。二つ目は、世間は慶應だけでは無いということだ。世の中には学校に通えない人もいる。エリート意識を持つのではなく、皆さんなりの方法で社会に貢献できる人になってほしい。三つ目は、慶應は皆さんを必要とはしていないということだ。偉大な塾員の皆様がすでに世界中に沢山居る。ここにいる皆さんに期待はしていない。ただ、もし義塾のために貢献したい、できる等といった人がいれば、私たちは全力でサポートする」と述べた。

また、塾員代表祝辞として、坂上弘慶應義塾出版会株式会社代表取締役会長は、福澤先生や小泉信三元塾長などの言葉を多数引用し、「このような言葉に囲まれながら私は学生時代を謳歌した。自由にチャレンジ出来た。皆さんも自分の居場所を見つけることができる。私は皆さんに三つの言葉を贈りたい。型にはまらない、友人を広くもて、三つめは自分で考えてほしい」との言葉が贈られた。

新入生代表による入学の辞では、経済学部の刈込彩佳君が、「入学した喜びを噛みしめ、義塾の校風を引き継ぎながら責任を持って努力を重ね、独立自尊の精神を持って、積極的に問題を解決していく所存です。また慶應義塾の一員であるとのプライドを持ち品行方正で、複雑な社会問題を対処するための知性を持ち、社会のリーダーとなることが我々の目標です」と抱負を語った。

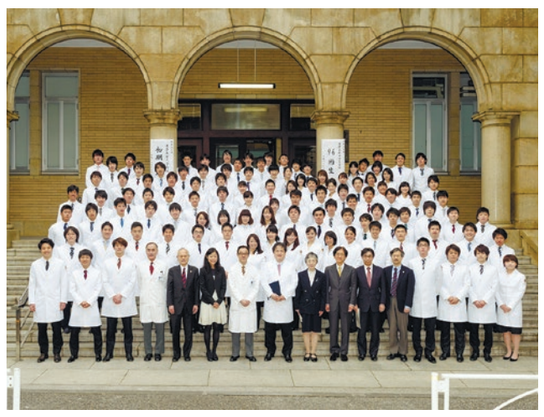
新入生6671名のこれからの活躍に期待したい。

（文　3年　牧原京平
写真　3年　阿部雄志）

式辞を述べられる清家塾長

第10回 白衣式

決意新たに、臨床実習へ



去る3月21日、平成27年度白衣式が、本塾北里講堂にて執り行われた。白衣式は、22年前に米国コロンビア大学で行われたのを初めとし、臨床実習に臨む医学生にプロフェッショナリズムを意識させるための行事として、今や世界中の医学部で採用されている。本塾では、2006年に第1回目の白衣式が行われ、今年で10回目を迎える。

式典には末松誠医学部長、竹内勤病院長、武田純三三四会長らが列席し、臨床実習を控えた96回生（新5年）110名に、祝辞を送られた。また、来賓として迎えた本塾医学部84回卒業生である有井麻矢Humanitarian Affairs Officer, Office of Emergency Programmes the United Nations Children's Fund（UNICEF）より、餞の言葉を賜った。有井氏は、自身の紛争地域における人道支援の経験を紹介し、現地の人たちの声から真のニーズを把握することの重要性を強調した。また、学生のうちに居心地の良い場所から少し離れる経験をしておくことを勧めた。

その後、96回生が日吉の1年生から信濃町の2～4年生の授業でお世話になった各科の先生方からのメッセージビデオ（96回生制作）が放映され、懐かしい先生方からの温かい言葉に会場は和やかなムードに包まれた。

そして、いよいよ白衣の授与である。参加した学生一人ひとりが、医学部・病院の執行部の先生方、太田喜久子看護医療学部長、来賓の先生方に白衣を着させて頂いた。真新しい白衣を着た学生がずらりと並ぶと、会場からは大きな拍手が沸き起こった。今年は例年同様、北里講堂に入りきらなくなるほど父兄の参加が多く、父兄らの関心の高さが伺えた。その後、96回生110名により、誓いの言葉が唱和された。

誓いの言葉は、有志により組織された白衣式委員会を中心に、96回生全員が協力し、数ヵ月をかけて考えられたものである。110名が声をそろえて誓いの言葉を読み上げると、会場からはより一層大きな拍手が沸き起こった。

最後に、平形道人医学教育統轄センター長が閉会の辞を述べると、4月1日より新たな門出に立たれる末松誠医学部長に、96回生から感謝の気持ちを込めて、今回学生たちが授与されたものと同じ白衣が贈られた。

この白衣式にて白衣を受け取ることで96回生は医療界の門戸を叩き、実際の臨床現場に出て医療および医学をより深く学んでいくことになる。4月から始まる臨床実習では、たとえ悩み迷うことがあっても初心に帰ってこの言葉を反芻し、日々研鑽を積んでいきたい。

（5年　谷口枝穂）

96回生 誓いの言葉

いのちと向き合い　私は何ができるだろう
愛と知恵を以て　ひとの幸せを願う
仲間と手を取り合って　人々の道を明るく照らす
判断力と勇気を以て　社会の未来を拓く
自らの使命を明らかに　医の道を志
高く学び続けよう
96回生一人ひとりが　感謝の気持ちを胸に
ここに決意します

平成26年度 慶應義塾大学医学部准教授講師会 総会および懇親会を終えて

准教授講師会 会長　末岡　浩（59回）

平成27年3月13日（金）に18時より第一会議室にて総会が開催された。現在、准教授講師会（准講会）は、会員数百三十二名からなり、粟津　緑（小児科学）、谷川瑛子（皮膚科学）、吉村公雄（医療政策・管理学）、今西宣晶（解剖学）、村松太郎（精神・神経科学）、須田康文（整形外科学）の幹事役の先生の深甚なる協力で運営している。

総会の審議では、昨年度にこれまで5年間に亘り貯蓄してきた資金から新棟建設のための募金、1千万円を一括して寄附したことが報告された。各種団体からの寄付としては、三四会に次ぐ大きな貢献であったことが報告された。

その後、18時半から総合医科学研究棟一階ラウンジにて、懇親会が催された。冒頭に毎年欠かさずに来賓として出席いただいた、末松　誠医学部長先生から、会員に対して「日本医療のR&Dに粉骨砕身して欲しい」と激励をしていただいた。先生は、4月1日より、「独立行政法人 日本医療研究開発機構」の初代理事長に御就任されるため今回が学部長として最後のご挨拶となった。

今年のミニレクチャーは、須田康文先生（整形外科学）に「外反母趾って病気？」と題してご講演いただいた。国民病とも言われ、3人に1人の病気で、女性に多く、加齢と共におこる内因や、ハイヒールによる外因に分類される。また、外反母趾は、腰や膝の痛みも伴う。親指の下にある種子骨の部分が、裸足でも痛い、見た目が悪い場合は、手術に移行し、年間300症例を施行しているとのことだったが、須田先生の抱える日本の膨大な医療マーケットに全員が驚嘆した。

シリーズ講演は、西野るり子先生（産婦56回）をお呼びして、先生が危険を顧みずに参画してこられた「国境なき医師団」のお話しを賜った。世界の紛争地での医療援助活動の体験と題して、全く我々とは異なる世界の医療についてご講演をいただいた。ソマリアは破綻国家と呼ばれ、病院を始め公共サービスが一切ないため、16人に一人が妊娠出産で亡くなるとのことであった。西野先生らは、ベッド数が、20床の病院を作り、手術のスタッフは、2名いても経験がない状態だったが、無事に帝王切開が出来たと話された。スリランカは、病院も学校もあったが、内戦で駄目になり、紛争地域からは、ベテラン医師、看護師、薬剤師が逃げ出していなくなった状況下、西野先生らは果敢にも公立病院のサポートをされてきた。日本のように経腟超音波などの機器もないので、産まれてくるまでは、胎児はどういう状況なのか全くわからなく、2300グラム以下の場合は、諦めろと言われたり、その一方で、小児科医がいなくても1700グラムで産まれて、母乳だけで育った子供もいるなど体験出来ない話も披露された。

その後は、乾杯と食事をしながら、昨年挨拶が出来なかった会員からの挨拶を含め、新入会員17名の紹介が行われた。左記に新入会員をご紹介します（順不同・敬称略）。

岩田　卓（産婦人科学（婦人科））、猶木克彦（医学部腫瘍センター）、中川竜介（微生物学・免疫学）、小杉志都子（麻酔学）、柴田　護（内科学（神経））、深田淳一（放射線科学（治療））、森田林平（微生物学・免疫学）、佐々木　文（医学部病理診断部）、山岡邦宏（内科学（リウマチ））、掛川　渉（生理学）、久保亮治（皮膚科学）、安岡秀剛（内科学（リウマチ））、中本伸宏（内科学（消化器））、大喜多　肇（病理学）、尾島英知（病理学）、家田真樹（内科学（循環器））、鈴木重明（内科学（神経））

昨年の准講会は、大変な大雪に見舞われ、帰宅できない人もいたのに対して、今年は安心して東京會舘の温かい料理を前に夜長の談笑を楽しみ、会を終えた。

末松　誠医学部長の力強いメッセージが伝えられた

須田康文先生から女性の美しい足への神の手の話しを聞いた

西野るり子先生は果敢にも国際貢献をされた女神のような存在であった

募金の声

新病院棟建設に向けた内科学教室同窓会の取り組み

慶應義塾大学内科学教室同窓会 会長　後藤　文男（神内30回）
新病棟建設募金委員長　福田　恵一（循内62回）

慶應義塾大学医学部では2017年に医学部創立100年を迎えようとしており、その記念事業として新病院棟を建設中であります。既に完成した3号館に加え、現在I期工事としてCT、MRI、内視鏡センター、血管造影室が入居する6階建ての新病院棟（1号館の一部）を建設中です。今後はこの検査棟の竣工の後、II期工事として外来、手術室、病棟等を収容する1号館本体の工事へと進む予定です。この新病棟建設を起爆剤として、慶應義塾大学医学部のすべての基礎・臨床教室は一丸となって世界に冠たる慶應医学達成にむけて日夜努力を続けております。また、建設の槌音を聞くに付け胸が高まりますのは、学内にいるものだけでなく、三四会の皆様もご同様ではないかと思います。

この新病棟建設に際しましては、皆様もご存知のように三四会を中心に募金活動を展開しているところです。内科学教室同窓会の皆様も個人としてこの新病棟建設に多額のご寄付を頂戴しているものと存じます。これまでに既にご寄付を頂いております先生方、あるいは今後、個人としてご寄付を予定されている先生方も数多くいらっしゃるとは思いますが、先般の内科学教室同窓会幹事会におきまして、内科学教室同窓会としてぜひ新病棟建設に何らかの力になりたいとの議論で盛り上がりました。

そこで、個人の寄付とは別に内科学教室として新病棟建設に寄付をしようという提案がなされ、可決されました。内科学教室同窓会は会員数1589名程度在籍しておりますので、1人1口2万円として最低目標額2000万円を目指して募金活動することと致しました。内科学教室同窓会も、これまでこの寄付を念頭に準備金を用意して参りましたが、まだまだ目標額に遠い状況です。内科学教室同窓会の皆様におかれましては、1人でも多くの先生方からご寄付を賜ることをお願い致します。皆様には各診療科の教授からも個々にご寄付のお願いが送付されるかと存じますが、ご高配賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

なお、ご寄付は所定の振込用紙を使い、金融機関・郵便局の窓口にて直接お振り込み頂ければ幸いです。お送りしました振込用紙には内科学教室同窓会と記載されていますので、内科学教室の寄付として自動的に集計されます。また、三田の基金室より、寄付金の入金後、領収証と確定申告の際に必要な寄付金控除に係る証明書（写）がご自宅に発送され、税法上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。

このような取り組みを内科学教室同窓会が行いましたのは、新病棟が一日も早く充分な施設設備で竣工してほしいという1人1人の願い、卒業後年数が比較的若い医師や既にかなり以前に現役を退いた先輩方でまとまった金額を寄付しにくい先生方であっても気軽に募金が出来る環境作り、内科学教室同窓会として結束し出来るだけ多くの医師が参加することにより新棟建設に協力したいという連帯意識からだと思います。

慶應義塾大学病院は皆様の母校として、あるいは医師としてのあゆみの原点として大きな意味を持ってこられたと思います。今後も最高の医療提供の場、また皆様の心の拠り所となりますよう、日々努力して参ります。内科学教室同窓会に皆様におかれましては、ご高配賜りますよう宜しくお願い致します。慶應義塾のOBの結束は、他学の先生方からしばしば羨ましがられて参りました。我々自身もこの結束を誇りにしていると思います。このような取り組みが、様々なグループや他診療科の同窓会等の皆様のご参考になればと思い、ご報告させて頂きました。

視察の様子

解体作業が進む国立競技場

新病院棟 I期棟建設

＝3月の進捗状況＝

建設が進む1号館I期棟

執行部の視察が行われる

本年7月末に竣工予定の1号館I期棟は工程が順調に進み、2月の時点で地下1階から地上6階まで病院棟の駆体工事が完了しました。現在は主に設備、内装、外装などの工事が行われています。またI期棟オープン時に患者さんや教職員の重要な動線として使用される2号館との連絡ブリッジの工事も進められています。

去る4月2日には新病院棟建設実行委員会メンバーによる工事現場の視察が行われ、岡野医学部長、竹内病院長をはじめ医学部・病院執行部が内部の病棟、放射線部門、免震層などの各フロアを巡回しました。

今回の新病院棟建設プロジェクトの全工事完了は2020年3月の予定ですが、信濃町・神宮外苑エリアでは病院にほど近い国立競技場の解体作業も進められ、2020年夏の東京オリンピック開催に向けてその動きが加速しています。

（新病院棟開設準備室長　渡辺真純　64回）

鑑賞知来

現在、慶應義塾大学ではJST（独立行政法人日本科学技術振興機構）の支援を得て、医学・医療教育に関する高大連携事業「世界の医療を切り拓く君、自我作古」が進行中である（平成26～29年度）。この事業の一環として、本年3月15日～22日に全国から選抜された15名（うち塾内一貫高4名）の高校生がスウェーデンを訪れ、カロリンスカ医科大学や王立工科大学等での研修、現地高校生との交流などを行った。

本スウェーデン訪問は安井正人医学部教授（薬理学）がカロリンスカ医科大学の大学院に在籍し、学位を取得されたことがご縁で実現できた。実際には、慶應義塾大学とノーベル財団の下部組織であるスウェーデン若手研究者連盟との提携により計画・実施された。派遣した高校生はカロリンスカ医科大学では、医学部生による医療イベントに参加したり、Christian Broberger教授の細胞生物学の講義を受講した。また、王立工科大学では日本人の准教授の講義などを受けた。高校生たちは本交流を通じて医学・医療の国際性と英語によるコミュニケーションの大切さを十分に理解した。本交流は今後も続き、本年8月にはスウェーデンの高校生を受け入れる。

今回派遣した高校生は、通常は医学部、薬学部、理工学部の研究室で個人研究を指導して頂いている。また、数学や脳科学オリンピックの予選を通過し、国際大会を目指している者もいる。拙速な教育との謗りもあるかもしれないが、早期の科学教育が能力を進展させ、意欲を伸長させることも事実である。実際にこれらの高校生科学教育事業を始めて6年になるが高校生の学力・意欲の向上には眼を瞠るものがある。

昨年12月に出された中教審の答申は大学入試改革ばかりに焦点があてられているが、文部科学省の主題は「高大接続」である。これら事業を通じて優秀な人材を高校から医学部へ繋いでいきたい。

（化学教室　井上浩義　63相当）